

Title	本納町史(本納町社会教育委員会編, 吉川弘文館刊行)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.1 (1956. 5) ,p.86- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560500-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

本納町史

(本納町社會教育委員會編
吉川弘文館刊行)

戦後における民主主義の成長と相俟つて、地方史の研究が新たな方向を與えられ、目覺しい發展をとげつつあることは、今更事新らしく喋々するまでもないが、それに伴つて、優れた郷土史の刊行が相次ぐに至つた點は注目すべき事實と云わねばならない。本書もまた、その一つとして特記に價するものと云えよう。

本納町はいわゆる九十九里平野の一小邑であつて、最近の町村合併によつて著しく範圍を擴げたとは云え、この地方でも、さして大きいとは云いかねる町である。それ故、特に独自の史料も多からず、考古學的遺跡遺物にも恵まれず、郷土史に共通な悩みである一般的な通史と、郷土自體の特異性との關連をいかに調和させてゆくかという點で、極めて困難な述作であつたことが窺われる。しかし執筆者である川村優氏は新進の學徒として、よくこの難題を處理し、新しい郷土史を生み出された。即ち、數多くの圖表を用いて科學性を與えているほか、冒頭に、郷土における歴史的變遷の概観の一項を設けて一般人士の理解に便ならしめ、卷末には略年表を添えるなど、苦心の跡が察せられると共に、

中世以降においては關係古文書が十分に驅使されており、學術書としても利用價値が多い點、たしかに成功したものと云つてよい。特に現在九十九里地方の綜合調査を行つてゐる我々にとつては、まことに有益であり、その努力を多としたい。

本書は 緒説(一、郷土の成りたちと自然環境 二、郷土における歴史的變遷の概観) 第一章 原始古代、第二章 中世、第三章 近世、第四章 最近世・現代、の各章に分れてゐるが、全卷約五〇〇頁のうち、半ば以上が最近世・現代の章に充てられ、残りの大半が近世に、古代、中世はあわせて七〇頁ほどにすぎない。これを以てしても、いかに中世以前の資料が不足しているかが窺われるが、この部分において、更に一段の配慮が望ましかつた。例えば評者の専門の立場からすると諸説において自然環境を述べるに當り、九十九里平野におけるこの本納町の占める位置が、人文地理的な觀點から一層明瞭に位置づけられるべきだつたと思われるし、九十九里平野の形成と本納町の成立が、考古學の活用によつて更に生き生きと論じ得たのではないかと惜しまれる。すなわち原始時代の遺蹟は橘神社境内附近の繩文文化中期の遺蹟を擧げ得るに止まるが、これは珍らしい丘陵下の遺蹟であつて、大網附近や一ノ宮の低地遺蹟群と併せて、この附近の平野形成の年代と、古代人の生活とを、かなり明らかに窺うことが可能となるのであるが、著者の取扱いは考古學的概説の方向にのみ向けられ

てしまつてゐる。

また古代において特に重視すべきは式内社橋神社の存在である。社後の小丘は日本武命が弟橋姫の遺骸を葬つた所と傳え、祭神も弟橋姫を主とし、日本武命と姫の父忍山宿彌を合祀するといふ。勿論町史編纂の企てそのものが恐らくこの古社の存在によつて推進されたものであろうし、人々の信仰の問題と對決することは郷土史の宿命であり、不可避の難事であるかもしれないが、この神社に關する記述、特に日本武命に關する部分が明治時代の史學を一步も出ず、最近の研究に全く觸れていないのは、今日の郷土史として、やはり一考を要する問題ではなからうか。結論は別として新らしい研究の要點を紹介するだけでも、或いは史實と傳説の限界を示唆することも、扱ひ方の如何ではむしろ本書の指導的立場を高める結果となり得たのではなからうか。それと並んで橋神社にある數々の神事や、郷土の行事などに對して、民俗學的な研究が少しも加えられていないのは遺憾の極みである。むしろ、右に指摘したような諸問題を中心に古代の章を編述されたならば、筆者が明瞭に意圖している郷土の民衆の長い年月に亙る生活の諸相が豊かに浮彫りされて来たのではないかと惜しまれてならない。

しかし以上述べた所は、誠に望蜀の願ひであつて、本書の眞價は近世以降における詳細な叙述を含めた全卷を一體として把握さ

るべきものであろう。その意味において、冒頭述べた如く、郷土史中の白眉に屬するものであろうことを重ねて附言しておくたい。

(清水潤三)

Joseph Lortz, *Geschichte der Kirche,*

in ideengeschichtlicher Betrachtung,

Münster Westfalen, 17 und 18 Auflage,

1953.

教會史というものは扱いにくい對象である。第一に、教會といふものの本質が超越的な神的啓示にもとづく超自然的超世界的なもので、その制定も運営も目的も究極的には人の手の中になく自然的理據の外にあるからである。しかしそれがこの世界において一つの生命有機體を構成し、信徒の團體として一つの可視的な「國」*Civitas* を成す限り、そして文化・社會・國家の領域に本來的に——偶然的ではなく使徒的使命として——參劃する限り、「歴史」の次元に入ってくる。そこでおのずと教會史の研究には二つの方法が要求される。即ち、教會史を教會の神的源泉からその演繹的展開として見る見方と、教會の營みが人間に托せられ世俗社會と接觸する面から見て、そこに生じうる人間の限界と功罪を事實的にとらえて、それを通じて神意の時間的實現を讀みとつてゆくという行き方である。前者を「教義史的考察」*dogmen-*